非暴力平和隊・日本(NPJ) ニューズレター

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

第20号

〒113-0001 東京都文京区白山1-31-9 小林ビル3階

Tel:080-5520-3077 E-mail:npj@peace.biglobe.ne.jp

Fax:03-5684-5870 Website:http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/

2007年11月20日発行

巻頭言

「対話」こそ非暴力平和的解決の道である
ーナイロビ総会に参加してー

NP国際理事　　阿木幸男

25日、「国際会議」はマイリード・マグワイヤー女史(1976年ノーベル平和賞受賞者、北アイルランド)によるオープニング・スピーチで幕をあけた。一番前に大畑さん、岡本さんと座っていた私は、スピーチが始まって、2、3分すると鳥肌が立つ感動を全身で感じていた。

＜こうして、このようなすばらしいスピーチを聞けるなんて、ナイロビにやって来て、本当に良かった＞と心の中でつぶやいていた。NP 国際会議のオープニングにふさわしい内容のスピーチであった。

1970年代初め、北アイルランドではカトリック・グループとプロテスタント・グループが激しく対立し、暴力と殺戮が日常化していた。そんなある日、妹アンと4人の子供たちは道を歩いていて、イギリス軍とIRA（アイルランド共和国軍）が衝突する場面に遭遇。

巻頭言　「対話」こそ非暴力平和的解決の道である　NP国際理事　阿木幸男・・1
NPナイロビ総会　東アジアコーデネーターの立場から　NPJ理事　岡本三夫・・3
NPナイロビ総会　NP活動５年間の軌跡　共同代表　大畑豊・・・4
NPナイロビ総会　世界規模の構築　NP事務局長　メル・ダンカン・・5
NPナイロビ総会　・・・マイリード・マグワイア女史インタビュー記事要約・・・・・9
総会後のNP新体制　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
ナイロビ総会写真　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
プロジェクトの現況（スリランカ他）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
非暴力を語る会（ナイロビ総会報告会各地での開催）　・・・・・・・・・・・・・２１
NPJ　4－9月会計報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２
非暴力平和活動と＜9条世界会議＞　・・・・・・・・・・・２３

イギリス軍側が車に乗ったIRAの男性、D・レノンさんを狙って撃ち、車が歩道に乗り上げた際にアンたちが巻き込まれてしまう。
4人の子供のうち3人が死亡、アンも重傷。IRAの男性は死亡。
　その後、アンは事故のショックから立ち直れず、自殺。
マグワイヤー女史は子供たちの葬儀で出会ったベティ・ウィリアムズ、若い男性ジャーナリスト、キーランと 3 人で話し合う。私たち市民に何ができるだろうか？停戦和平のために何をすべきなのだろうか？
「こうした紛争状態を今、すぐに止めなければならない。暴力では何も解決しない。対話で平和を取り戻す運動、“peace　people”を3人で始めよう！」
　こうして、彼らが住む西ベルファストの労働者階級が住む地域から新たな平和運動が誕生した。
“peace　people”のメッセージは、
「皆さん、よく考えてみてください。問題は暴力では、けっして解決しません。対話による平和的な、非暴力的な方法でしか、解決の道はありません。
　私たちは愛し、愛されるために生まれてきたのです。大切なのは『非暴力』『平等』『社会正義』です。私たちの身のまわりは『怒り』が満ちあふれています。
　でも、『怒り』を『愛すること』、『与えること』に転換して行きましょう。
　私たちが日々、『真実』、『愛』、『幸せ』のうちで生きることで平和は近づいて来るのです。
　誰とでも、どんな人とでも対話をしましょう。敵対する人たち、グループ、団体、組織とも根気よく、平和的解決のために対話しましょう。政治的リーダーたちに対話を要求して行きましょう！」

妹アン、子供たちの死に直面して、マグワイヤー女史は怒り、憎しみ、悲しみの感情の揺れ動きの葛藤の中で、ある祈りの言葉を思いつき、毎日、口にすることにする：「神様、私が平和で幸せで、光でありますように！」
　ある日、父が苦しんでいるマグワイヤー女史に言った言葉を思い出す。
「けっして、あなたが怒っている間に日が暮れてしまわないようにしなさい。ただ許しなさい。」
　いつしか、2人の女性が中心となってスタートした運動は、半年で西ベルファストの暴力を70%減少させ、全国運動となり、長年、対立していた組織の代表を停戦和平のためのテーブルにつかせることに成功する。

　NPが今、取り組んでいるスリランカ・プロジェクト、ミンダナオ・プロジェクト、グアテマラ・プロジェクトの平和的解決の道は容易ではない。でも、人間が生み出した民族紛争は人間によって解決できるはずである。非暴力平和の道こそ真の解決の日をもたらすだろう。
　マグワイヤー女史のスピーチを聞いて、私は誓った。
　　ただひたすら、まっすぐに、紛争の解決の日を一日でも早くするために、非暴力の道を真摯に歩いて行こうと。
　NP には多くの非暴力の仲間たちが世界中にいる。今は「点」にすぎないかもしれないが、いつかきっと、「面」となって、この暴力的な世界をスマイルと共に転換する日が、やって来ることを信じたい。

ＮＰナイロビ総会に参加して―
東アジアコーディネーターの立場から

非暴力平和隊・日本　理事　岡本三夫

非暴力平和隊（ＮＰ）ナイロビ総会は９月２４日～３０日に開催され、４６国から１４３人が参加した。地域的には北米４２人（カナダ人１人以外は米国人）、アフリカ４１人、アジア２５人、欧州１８人、中南米１２人、中東５人だが、米国人４１人という数字が目立つ。欧州各国と日本のＮＰ活動が活性化しないと、運営や資金調達における米国偏重は緩和されないだろう。

総会会場となったケニア情報技術大学(KCCT)は警護官によって入構を厳重にチェックされており、滞在中に安全面での不安はなかった。『地球の歩き方』の内容を真に受け、盗難や強奪を警戒してラップトップ持参は断念した。が、不安は杞憂だった。電脳不所持の私は脳の半分をホルマリン付けにしてしまったようなもの（電脳時代の悲劇！）。したがって本報告も不完全なメモと脳半分の記憶に依存していることをお断りしておきたい。

さて、「東アジア地域コーディネーター」としての私はスタッフの一員という扱いだったため、「アジア地域コーディネーター」であるインドのラジヴ・ヴォラ氏との協力関係構築がまず必要だった。MO の SwarajPeeth 代表でもある夫人のニル・ヴォラ女史と共に参加したヴォラ氏はインドで開催されたＮＰ創立総会の経験をもつベテランで、ＮＰ活動の裏表を熟知しており、新参の私への協力を惜しまなかった。ニル女史はインドのエリートなのだろう、ラジヴ以上にあらゆることについて発言する雄弁なインド代表だった。

アジア全域の国際理事立候補者３人は総会に先立ってアジア地域会議で推薦され、総会での選挙を待つばかりになっていたが、アジア地域会議には欠席していたフィリピン代表の一人から「アジア代表の理事を４人とし、その内の１人をフィリピン人にして欲しい」という強い申し入れがあった。事前に立候補を表明していた候補者はインド、パキスタン、日本からのみだったが、フィリピンはミンダナオ・プロジェクトを抱えていることが主な理由だった。フィリピンは６人もの代表団を派遣してきており、不満は残ったが今後の重要問題にしてもらうということで手を打った。

「東アジア地域コーディネーター」は「デリーのアジア地域事務所と対等だが、国際理事会の構成上からサブ地域となったもの。東アジア・サブ地域とは、日本、韓国、オーストラリヤ、ニュージーランド、さらには中国、(台湾)、モンゴル、北朝鮮を包含。その他は南アジア地域とすることとなった」（０７年３月２５日、非暴力平和隊・日本　第五回総会議事録）ということだが、ナイロビ総会に参加したのは韓国と日本だけであり、東アジアにおけるＮＰ活動の強化は急務である。

総会最後の日にビルマの民主化問題のニュースが伝わってきて、ＮＰとしての態度表明が求められた。例によって、不偏不党（ノン・パーティザン）が話題になったが、「ＮＰは人権侵害や暴力に対しては不偏不党ではあり得ない」ということが確認された。当然である。

ＮＰの各国組織（MO）には「ピースボート」や「日本山妙法寺」のように「独自のプログラム＋ＮＰ活動」を有するMOと、非暴力平和隊・日本や非暴力平和隊・韓国のように「ＮＰ活動」のために作られたMOがある。そして、後者は圧倒的に少ない。その少ない韓国と日本のＮＰがナイロビに代表を派遣できたことの意義は大きい。

スラジクンドからナイロビへ
―――NP 活動５年間の軌跡

共同代表　大畑　豊

2002 年にインド・デリー近郊スラジクンドで設立総会が開かれて以来の NP 総会がケニヤのナイロビで９月に開催された。本来ならば３年ごとに開催されるはずだったが、諸般の事情で延期されていた。２回目の総会開催予定の 2005 年当時の記録を改めて見てみると日本への総会開催打診などもあり、理事会内でひと悶着あったことなども思い出した。

ナイロビへは日本から阿木幸男理事、岡本三夫・東アジア地域コーディネーターが参加した。途中経由地のドバイで、アジアコーディネーターのラジヴ・ヴォラなどの懐かしい顔にも会え、５年前の総会が昨日のことのように思い出された。

設立時には 68 だったメンバー団体（MO）は現在 95 団体となり、プロジェクトもスリランカへの 11 人から始まり現在 20 ヵ国から 25 人、その他ミンダナオ、グアテマラにも派遣している。これまでに数度の要員養成トレーニングのほか、トレーナーズ養成トレーニングも開催され、派遣要員やトレーナーの確保も進んでいる。UNHCR などの国連機関との連携プロジェクト、国連 NGO 資格の取得など、国際的信用、認知度もそれなりに得てきているように思える。

今回の総会参加者 152 人、44 カ国、およそ 70 の MO が参加した。前回の 130 人、47 か国と比べると遜色ないが、前回に引き続いて参加した人は私も含め 10 人程度しかおらず、継続性という意味ではどうかとも思われたが、５年経っていることを思えば人事一新は仕方のないことかもしれない。

地域別会議：　総会自体は 26 日からであるが、24 日に MO 地域別会議、25・26 日で「非暴力による市民保護」というテーマで一般公開の国際会議も開かれた。地域会議では各参加者・MO の自己紹介、総会に向けて地域ごとの意見の集約、NP や他 MO への提案などがざっくばらんに話し合われた。

アジア地域で出た課題・意見としては、東アジアとその他アジアとの境目の問題、使用言語（特に英語）の問題、NP と MO の関係が官僚的、「平和」「非暴力」という概念の欧米との差、アジア MO が NP の中で存在を示せていない、連絡体制の不完全さ（担当者の異動）、地域内 MO で隔年ごとの会合を持てないか、NP はスーチーさん問題に何もできないのか、国際理事選出の件などが話された。いずれも簡単に結論のでるテーマではないが、NP 自体が発展途上にある組織、活動なのだから、いきなり完全を求めず、今後も意志の疎通の重要さを認識して、前向きに意見交換していくことが確認されたといえよう。

国際平和会議：　国際会議には国連、アフリカ連合、EU からの出席もあった。ゲストスピーカーの平和受賞者マイレード・マグワイヤーは、条件なしに誰とでも話すことの重要さを説き、元ＰＢＩで研究者のリアン・マホニーは実践と共に理論構築もしていくこと、地元のみならず国際機関との交渉力をつけること、そして常に創造的であれ、と激励した。

私は総会開会時までしか居れず、総会自体の報告は他の２氏に譲りたい。部分参加ではあったが、顔と顔をつけあわせて話すことがいかに理解を深め、絆を強くし、そして NP を実態あるものにしていくか、ということを実感した。それと同時に、NP は成長している途上であり、行くべき道のりは長い、ということも感じたのも事実である。最近読んだ本にこのような言葉があった「非暴力の秘密兵器は忍耐である」（この「兵器」という表現に異論が出るのを気にしつつ）。

ナイロビ総会に先だつ 2 日間は、一般公開の国際会議が行われた。この会議の締めくくりとして発言した NP 事務局長のメル･ダンカンのスピーチを要約します。

世界規模の構築

メル･ダンカン　2007 年 9 月 26 日

★　ガンディーは、“宇宙に存在する魂の力を私たちが認めるならば､それが私たちを力づけ奇跡的な結果をもたらす。”と言った。非暴力行動が社会に変化をもたらしたことをさまざまな形で記録してきた非暴力戦略家であり著作者でもあるジーン・シャープ（Gene　Sharp）に、“あなたはいつ非暴力平和維持活動に関する本を書くのか？”と、デビッド・グラントが質問したとき、“それはあなたが書かなければならない。”と答えた。

★　今､私たちはその本を書いている；私たちの経験、私たちの知恵、私たちの資金、そして、私たちの命そのものによって。私たちはここナイロビの国際会議での 2 日間を通して 8 つの章を書いた。

第 1 章：私たちにとって重要なことは！

★　北アイルランドのノーベル平和賞受賞者マイリード･マグワイア女史は、会議の冒頭で､“あなた方がここで行っていることは、人類の生存を助けていることだ。”と宣言した。

ヒューマニタリアン･ダイアログ･センターのリアム･マホニーは積極的なプレゼンスの研究に過去 4 年間を費やした。非武装の市民達が現地の人々の態度をいかに変えることができるかを見て、“すべての当事者はさまざまな感受性を持っている。戦闘員は、相手が悪者だと世界が受け取ることを求めている。”と述べている。

★　NPSL のマルセル・スミットとジボ・エイリア（Jibo　Alia,ケニア出身）は NP チームがトリンコマリーやアライピディで NP が人々の命を救った事例を紹介した。

★　小グループの討議では､グアテマラやミンダナオで NP が市民に保護を提供している様子を話し合った。

私たちは､私たちの重要な活動を他の人たちが受け入れないことを許してはならない。

マイリードが思い起こしてくれたように、**“今日、私たちは世界のスーパー・パワーなのである！”**

第 2 章：私たちは十分なリソースを持っている

★　現在､幾つかのプロジェクトが進行中である同じ時期に､この会議に必要な資金が与えられるとは誰も一ヶ月前まで想像できなかった。私たちは今ここに必要なすべてのものを持っている。私たちの周りを見回してみようではないか。この部屋には豊かな経験、勇気、知恵と知識がある。

大きなニーズがあり更に大きな期待もある。

ウガンダ、ビルマ、ニジェール川デルタ問題に関する小グループで､幾つかの問題を話し合った。

NP はこれらのニーズの幾つかに対し対応できるであろう。しかし,NP を待つことなく、お互いに連携してほしい。私たちには傘下のメンバー団体があり、そして、地域の体制もある。それらを活用し、提携を築いてほしい。

最も重要なこと､それは非暴力平和維持活動は有効であり伝播するとの大胆な理念を私たちは持っていること。私たちの活動は NP と言う組織を乗り越えていくものである。私たちは暴力紛争への対応に際し､このようなアプローチを実験し広めていく必要がある。

私たちのリソースは成長している。市民社会の中に沸き起こりつつあるものがある。

Swarajpeeth のニル・ヴォラ（ラジブ夫人）

はそのことを**“私たちの心と精神の中の渇き”**と呼んだ。

第 3 章：多層レベル

★　私たちは多様なレベルでの私たちの活動を同時並行的に統合する必要がある：NP 内、地域内、国内、そして国際レベルで。

NP 国際理事のヤング・キム、ラム・マニヴァナン、メンバー団体（Chemchemi ya Ukweli）のドミニク・カリウキ修道士（ケニア）は、真の平和は私たちの内から始まることを思い起こさせるセッションを毎日の会議の初めにおこなった。私たちの内面的実践、精神的修養に関心を払うことが重要である、それが人々にどのように定義されようとも。

地域レベルについては、ニル・ヴォラがウッタ・プラデシュ州（インド）のヒンドゥーとムスリムが過酷な訓練を終えて非暴力の誓いを宣言した Swarajpeeth によるシャンティ・セナ(平和軍の意)の重要な運動について説明した。彼らは今、コミュニテイ内の暴力勃発の阻止に協力しようとしている。

スリランカ、フィリッピン、グアテマラにおける NP の平和維持活動プロジェクトの報告があった。国際平和維持活動家たちは、しばしば地域の市民と協力して保護を提供し、虐待行為の数を減少させ、オープンな対話を保ち、地域の人々がエスカレートする暴力の環境に挑戦して行動するのを支援している。

ヒューマニタリアン・ダイアログ・センターのリアム・マホニーはより広範囲な文脈を規定して、市民の積極的な保護の一義的なインパクトは次のようなものを含むとしている:

・保護
・暴力の抑止
・現地活動家を励まし力をつけること
・国際機関への影響

国際レベルに関して、元 UNICEF 幹部で現在 NP の上席顧問であるロルフ・キャリアーは、第一或いは第二の手段として市民の非武装の平和維持活動をもっと受け入れるよう我々が国連に対し提唱、提言する必要性を話した。国連には非武装の平和維持活動に関わっている組織が 15 部門ある。今、国連はどのような組織も単独ではできないことを認めて他のグループと共に活動しようとの気運が広まっている。

スリランカ・プロジェクトとして我々に何を求めるかとの質問に対し、マルセル・スミットがまず第一に国際的認知度だと答えたのには感銘を受けた。

すべてのレベルにおいて私たちは一貫した分かり易いメッセージを維持しなければならない。

第 4 章：緊張関係が私たちを強くする

★　私は NP を四方から縄で引っ張られている（競技の）リングであると考えている。私たちの活動はリングの中で起こっている。私たちはリングがしっかりするように両方のケーブルがピンと張ったようにする必要がある。もし片方が緩んだら、リングは傾くか落ちてしまう。

私たちが緊張関係にオープンに対処する限り、緊張関係は私たちに託された重要な仕事を見失うことなく私たちを強くする。

私たちは非暴力に対する哲学的なアプローチと戦略的なアプローチの間に緊張関係を持っている。“戦略的”という（軍事的な）言葉を使用するだけで私たちのある者は抗議する。

ウガンダのベーカー・オチョラ司教は非暴力に内在する深い赦しを引き合いに出した。マイリードは必要とされる情熱を滲み出す。ラジブ・ヴォラは私たちにガンディーの積極的非暴力へのアプローチを追い求めることを思い出させる。

同時にリアムは効果的な市民保護を提供するために示された戦術と戦略の詳細を語った。マルセルとアイラは更にこれらの戦略がスリランカで如何に役立つかを示した。

リアムは、NP は運動の構築をすることと、それと同時に、専門的な良質のサービスを提供しようとすることの間で逡巡していると指摘した。

★　どちらの仕事も決して小さなことではない。しかし、これらの間の緊張関係が、私たちが草の根に対して責任ある、必要で有効なサービスを提供することを保障している。私たちが持っている専門性と柔軟で創造性を維持する必要性の間にも緊張関係が起こる。積極的プレゼンスの報告、或いはスリランカの NP の活動の事例研究に加えてコロンビア、ミンダナオ、北ウガンダ、中東、グアテマラ、アフリカのグレートレイク地域、ビルマについて検討した小グループのプレゼンテーションは私たちがこの仕事を効果的に行うことを学んでいることを示している。私たちは専門性を高めている。しかし、リアムは私たちが専門家になるほど創造性を失うと警告した。私たちは仕事のありかたを学ぶ際に、絶えず創造的でありかつ経験に学ぶようにありたい。これに対する鍵は私たちの活動に対する批判にオープンであり、学び取った教訓を積極的に取り入れることを確実にすることである。

NP はこれらの緊張関係を必要とする。

第 5 章:　構造的諸問題への取組み

★　暴力は戦争の勃発以上のものである。それは最初の弾が撃たれる前から始まる。暴力は私たちの社会の構造そのものの中に組み込まれている。目に見える形の戦争によってよりも、新植民地主義や人種差別によって強められた構造的な経済政治システムによって殺される人が増加している。

★　ジョージ・ワシラ（ケニア）はこのような構造的原因に取組み、正義を促進するよう私たちに問題提起した。

★　マルセルはスリランカに関し，NP が既定の計画をもってやって来ないことが重要だと話した。むしろ、私たちの役割は、（求めに応じ、地元の人たちが政治的）**スペースを創りだすことを手伝い、保護し、地域の人が根っこにある諸原因を明らかにする**ことができるよう勇気づけることだ、と。

第 6 章：新たな機会

★　私たちは、人間の安全保障の概念そのものを再定義しようとしている、より広範囲な運動の一部である。

この新しい定義は領土を基本とした安全保障と言う狭い範囲を超えて、人間のニーズ、アイデンティティ、願望を基本にした安全の概念へと私たちを導くものだ。

この変わりゆく人間の安全保障の概念は新しい主役にスペースを開く。センジャ・コルホーネン（フィンランド）はこの変化は宗教改革に等しく画期的なことであろうと意見を述べた。安全保障が土地の取得と保護を基本としたものであった過去には、軍隊と警察が主役であった。概念の広がりと共に、市民社会というまったく新しい役割が出現し平和構築と平和維持活動がその中心を占めるようになった。

国家の主権の優位性もまた変わりつつある。エリアス修道士が述べたように、このことは OAU（アフリカ統一機構）から現在の AU（アフリカ連合）への移行に反映されている。OAU は 1960 年代に加盟国の主権を保護するために設立された。今,AU は人権の重大な侵害があるときは加盟国のそのような事態に介入する使命を持っている。

ロルフ・キャリアーは広がりつつある R2P（保護する責任）のグローバルな基準を引き合いに出した。この概念は市民が虐待されているときに国際社会の介入義務を確約したものである。主権は国家の市民への虐待に盾を提供しない。この基準のさまざまな応用が国連一般総会と安全保障理事会双方で採決されている。

私たちの提唱・提案を通して、平和構築活動、そしてこの会議にとって最も重要なことで

あるが、私たちの非暴力平和維持介入を通して、私たちは R2P における市民社会の役割を定義しているのである。
世界人権宣言が国際アムネステイのベースとして役立ったように、ジュネーブ条約が国際赤十字社のベースを提供したように,**R2P が非暴力平和隊のベースとして役立つ可能性**がるとロルフは指摘した。
リアムは私たちは注意深くあるべきと警告した。私たちが発展させようと支援しているこれらの概念自身がまさに残虐な行為を正当化するのに用いられるであろう。

第 7 章：私たちの理解を深めることと仕事を成し遂げる力

★　5 年前、私たちの多くがインドのスラジクンドに集まり非暴力平和隊を結成した。そのときスリランカを最初のプロジェクトの地として選んだ。ナイロビでの第 2 回の国際会議のこれまでの二日間を通して、私たちはスリランカの四年間の経験を回顧し分析した。私たちはスリランカでの私たちの活動が：

- 虐待行為の数を減少させ
- 被害者の苦しみを和らげ
- 対話の道をオープンにし
- 人々が恐怖に打ち勝つのを支援し
- 地域の人々が行動を起こす数を増大させ
- コミュニテイ内の事件に武装グループが介入するのを減少させ
- 少年兵の帰還と保護を行い
- 命を救済した

ことを確認した。
一方では、2005 年 11 月以降戦火の激化と共に,少なくとも 40 名の援助活動家を含む 5,000 人の人々が殺されたという冷徹な現地の現実がある。
しかし、戦争が激しくなろうとも、地域レベルでは保護的プレゼンスが変化をもたらしているとリアムは確認した。**人々はより安全に感じ、エスカレートする暴力の只中で市民社会構築の活動が一層可能になっている。**
私たちは私たちの責任を再確認し,今日ここに出席の素晴らしい現在と過去の平和維持活動家、ジボ･アリア、ピーターズ、シヴァ・アドヒカリ（ノルウエー）、ベッツィ･クリスティ、オルー・オティエノ、ジャン･パッション、マルセル･スミットに謝意を表したいと思います。

第 8 章：私たちの活動は“つながり”（relationship）に拠り立っている

★　これまでの 2 日間を織りなしている一貫したテーマは私たちの活動が私たちが活動する地域でのつながり（関係）構築にベースを置いているということである。このようなつながりは時間がかかり、急ごしらえであってはならない。このことは地域レベル、国レベル、国際レベルで共通である。重要な要素は次のものを含む：
受け入れられること：ここでは招聘が鍵である。平和維持活動家は活動の拠点を持つとすればそのコミュニテイによって受け入れられなければならない。
信頼性：市民の介入者は,私たちが何をしているかを知り、十分に訓練されたプロであることを実証しなければならない。
信用：個人やコミュニテイは、私たちがそこに長期に滞在し困難な仕事を行い、苦難を分かち合う意思があることを知る必要がある。
つながり：戦争はつながりを最終的に裂いてしまうものであろう。私たちが支援し、私たちのメンバー団体によって代表される市民社会の活動は、そのような決裂の根源にある原因と取組み、平和を構築するためにつながりを再び縫うことである。**市民非武装平和維持活動家の仕事は、そのようなつながりが構築し永続されるためのスペースを開き活動を支援すること**である。　☆終わり☆

ナイロビ国際会議の冒頭でスピーチした

マイリード・マグワイアさん

のスピーチの内容はまだ未入手である。
女史は北アイルランド出身で１９７６年にノーベル平和賞を受賞したが、NPの賛同人の一人でもある。
ここでは、マイリード・マグワイアさんがあるジャーナリストのインタビューに答えている内容の抜粋(出典はノーベル賞公式ウェブサイト)を翻訳し女史の活動の背景をご紹介する。
（http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/laureates/1976/corrigan-interview.html）☆☆☆　聞き取りと翻訳は会員の田中泉さんにお願いした。

****

１９７６年８月１０日、私の妹アンと４人の子供は、道を歩いていてイギリス軍とＩＲＡの衝突する場面に遭遇しました。イギリス軍側が車に乗った　ＩＲＡの男性Ｄ・レノンさんを狙って撃ち、車が歩道に乗り上げた際にアンたちが巻き込まれてしまい、４人の子どものうちの３人が死亡、アンも重態となってしまいました。また、ＩＲＡの男性も、亡くなりました。私は、子供たちのお葬式で出遭ったベティと、若い男性ジャーナリストのキーランと３人で、「こんな状態はいますぐに止めなければ。暴力では何も解決しない。」と決意し、”ＰＥＡＣＥ　ＰＥＯＰＬＥ”という運動を始めました。

ベティはカトリックの家庭に生まれ育った人でしたが、プロテスタントの人と結婚していました。私自身はカトリックです。私たちが住んでいたのは西ベルファストの労働者階級が住む地域でした。人々は国家とゲリラの両方の側の暴力に苦しんでいました。日常的暴力のサイクルが存在していました。

ここで私たちが人々へ発したメッセージというのは、『考えてみてください、問題は暴力では解決しません。対話による、平和的な方法でしか、解決しません』というものでした。私たちは巨大な集まりを組織しました。また、一般的に危ない地域と言われていた地域も含めて、ありとあらゆる所に歩いていきました。

１９７６年８月から１２月まで、毎週欠かさず土曜日に歩いたのですが、南アイルランドでも、イギリスやほかの国々でも、人々が私たちを支援して同じ運動を組織してくれました。

この運動の目的は人々に尊厳を持ってもらうことでした。それによって、皆は恐怖によって動けない状態から抜け出し、暴力の根源を探し始めることができるようになりました。私たちは殺しの脅しなどには屈せず歩いて行き、恐怖を克服しました。それまでは人々はお互いを「自分とは違うコミュニティーからの相手」と見なしていましたが、私たちは、その中を歩き、「怖がる必要はありません。本来の私たちでいましょう」と励ましたので人々は自分たちの問題に向き合えるようになりました。

結果的に、この運動の初めの半年で暴力が７０％減少し、二度と元には戻りませんでした。私たちは＜状況は変えることが可能なのだ＞という希望を人々に与えることができたのです。

****

ベティと私の２人の女性でのノーベル平和賞受賞となったのですが、一緒に運動を始めた男性キーランが受賞を逃したことは残念でした。３人がトリオを組んでいた運動でしたので。でも、当時は女性が役割を担う機が熟していたともいえます。歩いた人々のほとんどは女性でした。なぜだったのでしょうか。

１９６９年から１９７６年まで、ベルファストはまさに地獄と化していました。町には

爆弾がしかけられており、人々は日常的に、殺しあい・撃ち合いをし、拘束されていました。女性たちは家族が暴力に巻き込まれることをとても心配していました。そんな時、彼女たちは何かをできる機会に巡り合ったのです。歴史的に見ても女性は男性の担ってきた軍事的な役割とは縁がありません。女性は、軍事力が問題を解決するという狂ったメンタリティーの男性たちを開放できるでしょう。女性には、平和の創造、非暴力と対話の文化のためのすばらしい役割があるのです。私たちの運動はそのことを見極めていました。でも、あくまでも男性と女性が一緒に働いて、とても良いチームを組むことができたのでした。

****

私たちは人々を敵視してはいけません（「テロリストを捕まえろ」など）。私たちは自分たちと自分たちのコミュニティーを変革しなければいけないのです。暴力は、時代遅れとして脇においやり、非暴力のテクニックを使いましょう。必要なのは、暴力ではなく「敵」と交渉することです。そして根底にある要因を深くみつめなければ、同じ循環の繰り返しとなってしまいます。不正は暴力をもたらし、暴力は不正・絶望・怒りをもたらします。誰でも怒ることはありますが、怒りを平和の創造に転換させましょう。この状況を作り出したのが私たちなのならば、私たちが変えられるのです。北アイルランドについて言えば、私は、政治的指導者たちが話し合うこと、そして、人々の間に信頼が築かれることを望みます。人々が、それぞれの伝統、宗教、旗よりもまずは人間性に重きをおくことを。

****

私は、子供たちのお墓のお花を持って亡くなったＩＲＡ兵士のお母様に会いに行きました。彼を撃ったイギリス軍の男性の為にも祈りました。私たちの全員が暴力と紛争に巻き込まれていました。皆に責任がありました。暴力に対して曖昧な態度を取り、言い訳を続けていたのです。私たちは相手に懲罰を求めるのではなく、愛情深く平和的にならないといけません。

父の言葉が自分に影響を及ぼしたと思います。「決してあなたが怒っている間に日が暮れてしまわないようにしなさい。ただ、許しなさい」

★★★★★★★★★★★★★★★★★★

デビッド・グラントという人

★★★★★★★★★★★★★★★★★★

高野山でリタ、マーテイ夫妻へのインタビュー（ニューズレター19 号掲載）の時、デビッドにも加わってもらい、デビッドの NP との係わり合いなどの話も聞いたので、デビッドの素顔に接してみよう。

■デビッドの生い立ちについて、会議の二日目の夜、大阪でのパネル討議の際の彼の冒頭の自己紹介は大変印象的であった。彼はアフリカ系アメリカ人を両親として生を受けた。住んでいたコミュニテイはデビッド一家を除き全て白人であったので、デビッドは慣習に従って遠くにあるアフリカ系アメリカ人の学校に通わねばならなかった。ところがある神父のはからいで、地元の学校に入れることになった。しかし、いつも白人の子ども達に殴られるなどいじめを受けていたので、あるとき、そのことを父親に話した。父親の返事は“殴られたら殴り返せ”であった。それからは、殴られたら殴り返す喧嘩の連続であったが、ある時、そうする自分に疑問を持つようになった。これでは何も解決にはならないではないか？これが自分の非暴力思想の原点であったと思う。

■デビッド・グラントは、広島に原爆が投下

された 10 日後に生まれた。即ち、1945 年であるが、アメリカで人種差別を廃止する公民権法が成立したのは 1964 年であるので、デビッドが小学生の頃はマルチン・ルーサー・キング牧師による公民権法をめぐる活動が最も盛んであった時代である。デビッドは、広島、長崎の原爆についても特別な思いを持っているようだ。今回は、日韓東アジア会議の前に、8 月 6 日の広島原爆記念式典に参加した。

■デビッドの NP への関わりのきっかけは、1999 年ハーグで開催された市民平和会議「ハーグ平和アピール」への参加であった。若い時からガンディーのシャンティ・セナ（平和隊）の思想に共鳴して様々な活動に従事してきたが、この頃はオランダを拠点とする国際友和会（IFOR）に所属し、アフリカ、中東、アジアを担当していた。

■「ハーグ平和アピール」会議では、非暴力による平和構築、紛争防止や介入の活動に従事してきたヨーロッパの NGO のグループ“ヨーロッパ市民平和活動ネットワーク：略称 EN.CPS)”とデビッド・ハートソーやメル・ダンカンのアメリカ勢グループが NP の構想をめぐって活発な主張を展開した。地道で繊細な、小さな活動の積み重ねに誇りを持っていたヨーロッパグループは、実績もなく大口をたたく、カーボーイ（アメリカ人たち）が何を言うか、というような雰囲気であった。

■実はデビッド自身も、この会議でワークショップを計画していたが、デビッド・ハートソーのプレゼンテーションとかち合って誰も参加者が来なかったので、デビッド・ハートソーのプレゼンテーションに出席し、二つのグループの勝敗の行方を興味深く見守っていたのだ。幸いにして両者は歩み寄り、そして自分も参加を決めた。（注記：EN.CPS のほとんどのメンバーが現在、NP のメンバーになっている）

■IFOR で活動していたとき、オランダの中東監視団（イスラエル・パレスチナ）のトレーニングを受け持った関係で、イスラエル・パレスチナは何回も訪問していた。その関係で,ＮＰの最初の派遣先調査では、デビッドはイスラエル・パレスチナの調査を担当した。2001 年 11 月設立総会での候補地選定の投票でスリランカが選ばれたときには正直失望したが（投票結果はスリランカ 60 票、イスラエル・パレスチナ 50 票と僅差であった）、今考えると正しい選定であったことが実証されている。

■デビッドがスリランカではなくイスラエル・パレスチナを選択すべきと考えた理由の一つは、“大規模派遣“の実現性であった。スリランカでは大規模にはならないが、イスラエル・パレスチナでは大規模になる可能性があると思った。現在では、“大規模派遣“について NP 内部で様々な議論がある。一方、ＮＰＪでは資金等の制約がある現状にも拘らずスリランカ・プロジェクト以外にミンダナオやグアテマラのプロジェクト等の新規プロジェクトを何故やろうとしているのかとの疑問があると聞いている。その理由の一つは“大規模派遣“の可能性の追求である。コロンビアは大規模の可能性がある。また、スリランカ・プロジェクトを通して,ＮＰは国連の UNICEF や UNHCR 等諸機関と資金提供も含めて緊密な関係を築くことができたが、こうした機関は NP の大規模派遣の能力構築を要請している。NP は最近、UNICEF の幹部として諸外国で活躍した人を上級顧問として迎え入れた。彼の今後の NP での活躍を大いに期待している。

■デビッドのどんな時にも物静かな話し振り、人の意見に謙虚に耳を傾け、自分の意見を押付けるのではなく相手の理解を求めることに主眼を置き、自己反省を率直に表明する姿に、非暴力平和の唱道者として歩んできた一端をうかがい知ることができた。★

総会後の NP 新体制
―国際理事会メンバーとその横顔―

2007 年 9 月のナイロビ総会で新たな国際理事が選出され、
国際理事会メンバーにより新たな共同代表が選出された。(○印は新任)

国際理事会(IGC)　　（定員１７名、現在１４名）

アフリカ	オマー・ディオプ、ジョン・スチュアート	(2 名)
ラテンアメリカ	○テオ・ロンケン、○コーテモック・ロメロ・ヴィラゴメス	(2 名)
アジア太平洋	○ファルーク・ソハイル・ゴインディ(共同代表)、○阿木幸男、ラム・マニヴァナン	(3 名)
ヨーロッパ	エリック・バックマン(財務担当)、　○マテオ　メニン、シモネッタ・コスタンツォ・ピッタルーガ(書記)	(3 名)
中東	イスラエル・ナオー、○ルーシーヌツセイベ	(2 名)
北米	○フェイス・エドマン、ドナ・ハワード(共同代表)	(2 名)

国際団体　　その他の団体 からの選出は未定

☆国際理事の各委員会所属についての情報は 2007 年 11 月－12 月に決定する予定。

・・

主な国際理事の横顔

☆共同代表ドナ･ハワード：2 人の息子の母。米国で長年平和活動に従事：冷戦時代に米国の潜水艦に核ミサイル発射を指令するシステムを使用不可能にさせ刑務所で服役：低所得者階層、知能に障害のある人々、麻薬中毒患者などの擁護とカウンセリング活動など。NP 創設者の一人。

☆財務担当（Treasurer）**エリック･バックマン**：米国籍。ドイツで 36 年間、良心的兵役拒否者活動に従事。非暴力活動、市民不服従運動、環境問題、核廃絶運動，人種差別反対運動などの講師を務める。ヨーロッパの平和活動に従事するさまざまな NGO との深いつながりを持つ。

☆書記（Secretary）**シモネッタ・コスタンツォ・ピッタルーガ**：2 児の母。南アフリカで生まれイタリア国籍を持ち現在バルセロナ（スペイン）に住居を持つ。35 年間、非暴力による小規模の草の根の紛争解決の経験を持ち、広報、教育分野での教鞭をとっている。

☆阿木幸男（君島東彦に替わり国際理事会に就任）：1972‐1974 年、1976-1977 年、フィラデルフィアで非暴力トレーニングファシリテーターコースで研修。日本、台湾で平和運動、環境運動、市民運動、教育関係者向けに、多くの「非暴力トレーニングワークショップ」講師を担当。『非暴力』『非暴力トレーニングの思想』『核文明の恐怖』『マルコム X』など著書、訳書多数。成蹊大学文学部講師。

会場

集合写真

アジア地域会議

全体会議

マグワイアさんと阿木さん

マグワイアさん講演

メル・ダンカン事務局長

ドナ・ハワード共同代表

マルセル・スミット NPSL

マルセル・スミット

ティム・ウオリス前共同代表

ミャンマーに対する宣言文採択

会議の一こま

会議の一こま

採決の様子

グループ討議

グループ討議

グループ討議

インドの理事　ラム夫妻

デビッド・グラント

マグワイア女史を囲んで

リラックスタイム

リラックスタイム

アフリカの夕暮れ

プロジェクトの現況

各プロジェクトの現況について 9 月までの月報､最新のニュースなどをもとに概要をまとめた。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

スリランカ･プロジェクト

Ⅰ．スリランカの一般情勢

a) 政府軍は 13 年間ではじめて東部地域を制圧し、引き続き北東部地域で攻勢に出ている。情勢は LTTE 側にとって劣勢であり、ラジャパクサ大統領はタミール地域に自治権を与える連邦制を放棄し、統一国家しか選択肢はないと強気な発言をしている。しかし、11 月初めまでに幾つかの重大な事件が発生し、その影響が今後の情勢にどのような影響を与えるかが注目されるところである。

b) 一連の事件とは、まず、LTTE の和平交渉責任者であったタミルセルバン氏を政府空軍がピンポイント爆撃により殺害したことである（11 月 2 日）。これにより LTTE との和平交渉の相手方を失い、また、LTTE による自爆攻撃による対抗が予想され、和平交渉の進展への期待が大きく後退した。次に LTTE から分派し実質的に政府側の武装勢力として LTTE と対抗してきたカルナ派の分裂、カルナ大佐の国外逃亡、英国での逮捕（11 月初）である。国際世論に対し政府側はカルナ派との連携を否定してきたが、国際世論の政府に対する圧力が高まるであろう。

c) 最近行われたスリランカの世論調査で国民の 99 パーセントが現在の内戦状態の一日も早い終結を望んでいることが明らかにされた。また、世界 60 カ国で紛争防止のために調査活動をしている“国際危機グループ”は最近の報告で、持続的な平和のためにはタミール穏健派を満足させる政治体制が不可欠であり、統一国家への言及を撤回するよう大統領を諌め、2 大政党（与党・スリランカ自由党、野党・統一国民党）が結束してシンハラ･ナショナリストのイデオロギーに対処しなければならないと提言している。

Ⅱ．NPSL の活動

a) 上記情勢の悪化にも拘らず、NPSL は拠点を中心とした地域での活動を維持し、市民の信頼を強め、市民の草の根的平和活動推進に力強く支援している。9 月にはバティカロアやヴァルチェナイで NP 主催の国際平和記念行事が多くの老若男女を集めて平和への強いメッセージを発信した。9 月のニューズレターに掲載された「東部の母親たち」の詩が大通りを行進する群衆によって読み上げられた。「東部の母親たち」は近々､出版される予定とのことである。

b) 2 年間の任務を終了し退任する FTM の補充が行われている。日本からも待機中の徳留由美さんが 11 月下旬に赴任する予定である。また、支援業務を強化するための要員も採用中である。

c) 2005 年 10 月に赴任したプロジェクト･ディレクター、マルセル･スミットが 2 年の任期を終えて退任することとなった。FTM 同様、延長は可能であるが多分、心身ともに限界であったかと思う。彼の 2 年間の労を慰労し、新たな出発へと見送りたい。

d) 後任はトーマス･チェサ（Thomas Chesser）である。同氏についての詳

細は未入手だが、略歴は次の通り；
米国人。15 年間以上スーダン、カシミール（インド、パキスタン紛争地域）などで平和に関わるプロジェクトに従事。直前はパレスチナで ISM（国際連帯運動）のコーデネーターとして活動。ジャーナリズムと経営管理分野の専攻。

★★★★★★★★★★★★★

ミンダナオ･プロジェクト

Ⅰ．プロジェクト概要（第 1 次計画）

- 開始時期：2007 年 5 月
- 活動拠点：コタバト（支援事務所）、ダツ･サウデイ・アムパタン（マギンダナオ州）、ホロ（スール州）
- ICP（国際市民平和維持活動家）人数：責任者（PD）を含む 6 名
- 年間予算：33 万ドル

Ⅱ．現況

1 政府とモロ・イスラム解放戦線（MILF･･･モロ国民解放戦線 MNLF より分離）の和平会談が 9 月マレーシアで行われ、①1996 年締結の休戦協定（この時点では政府と MNFL 間）の完全実施と②国際監視団（マレーシア、ブルネイ、リビア、日本の 4 カ国）の 2008 年 10 月までの延長などが話し合われた。結論には至らなかったが、9 月ミンダナオの情勢は、小さな衝突はあったが比較的平穏に推移した。

2 NP ミンダナオは、コタバト（ミンダナオ･ムスリム自治区の首都）にまず拠点を設置し、マギンダナオ州とスール州の活動体制の構築に当たってきたが、9 月にそれぞれの州で活動拠点の設営（上述活動拠点参照）が完了した。

3 NP ミンダナオは、国レベルの政府機関との関係構築を始め、拠点地域の行政機関、対抗勢力（MILF,MNLF、その他の武装勢力）、現地パートナー、市民活動家、国際機関（UNICEF、国際赤十字社）、INGO などとの関係構築に努めてきたが、これらの関係構築の維持、増強は今後とも重要な活動として継続されよう。必要に応じて NP ミンダナオ諮問委員会のメンバー（フィリピン、ミンダナオの有識者、活動家などで構成）の協力を得て活動している。

4 当面の具体的活動は、国内難民の保護、支援や現地パートナー、活動家への同行である。「反テロ法」の制定により人権侵害の増加が懸念されているので、人権侵害の記録と報告も今後の活動となろう。

5 コタバト支援事務所は、現地（各機関の出先）並びに EC からの資金調達に努力している。8 月には NP 大口資金調達責任者エリカ･シャッツが訪比し NP ミンダナオ拠点の訪問、ダバオ、マニラその他の地域での資金調達活動を行った。

★★★★★★★★★★★★★

グアテマラ･プロジェクト

Ⅰ．プロジェクト概要

- 時期：2007 年 4 月～2008 年 2 月
- 活動内容：2007 年 9 月の国政選挙前後の期間、前 NP 共同代表クラウディア・サマヨアが所属する NGO の活動家の護衛的同行
- FTM 人数：責任者ベッツィ・クライテス他 2 名
- 総予算：9.5 万ドル

Ⅱ．現況

1　9 月 9 日の大統領選挙を含む国政選挙で、大統領候補者 14 名が立候補したが、いずれの候補も最低必要とされる得票率を得られず、規定により上位 2 名の決選投票が 11 月 4 日に行われることになった。11 月 4 日の決選投票の結果は、国民希望党（中道左派）のアルバロ･コロン氏が希少差で愛国党（右派）のオットー･ペレス氏を破り当選した。任期は 2008 年 1 月から 4 年間である。　５６歳の実業家コロン氏は、貧困撲滅のための雇用の創出などを強調。社会的支出の拡大や司法制度改革を訴えた。 コロン氏は大学教授をへて９１年に経済省副大臣。今回が３度目の大統領選で、前回は決選投票で小差で敗れた。　一方、元陸軍大将のペレス氏は、治安悪化に不安を募らせる国民に軍や警察による断固とした対応を訴えた。しかし、３６年に及ぶ内戦下に起きた虐殺で一翼を担っていたとの批判から、警戒する声も出ていた。1992 年ノーベル平和賞を受賞した先住民の人権活動家リゴベルタ・メンチュウ・トゥム女史（NP の賛同人の一人である）も大統領選挙に立候補したが、得票率は 3%であった（第 1 回投票）。

2　NP グアテマラのベッツィ･クライテスの報告によると、グアテマラ人で民主主義という言葉を知っている者は 1/3 程度であり、半数の国民は政治システムを知っていない状況であると言う。中道左派であれ右派であれ、少数の特権階層による支配システムに大きな変化はないだろうと記されている。今回の選挙期間中に殺害された候補者や政党関係者の数は、過去 22 年間で最も多かった。

3　NP グアテマラ･チームはクラウディア・サマヨアの NGO（LA　Unidad）の活動家の証言のための出廷,諸会合への出席、グアテマラ市外への出張などの護衛的同行に積極的に参加した。若干の余力ができたため、短期間という条件で他の NGO 活動家への支援も行った。ベッツィ・クライテスは 9 月末のナイロビ総会に出席後、ノース･カロライナの郷里でしばらく過ごし、10 月中旬にグアテマラでの任務に復帰した。

4　国政選挙監視団への参加（9 月 9 日）

　ベッツィ、ベゴ、ヴィトの 3 名は、9 月 9 日に実施された国政選挙に国際監視団の一員として参加した。その報告書が NP のウエブサイトに掲載されている。OAS や EU から大勢の監視団が参加したようだが、都市部は過剰であった一方、地方では手薄であったとのことで、2006 年 1 月のパレスチナの国政選挙の様子と似通っている。麻薬組織やギャング団が政党組織に入り込み、選挙に関する不正は常識を超えたものがある。この点、スリランカと比較し大きな違いである。ベッツィ他 2 名は、事前の訓練を受けて、当日は早朝 5 時 15 分から活動を開始したとのことである。

　投票日の投票所での監視団の役割は次のようなものであった：政党の宣伝材料の配布、偽の投票用紙の手渡し、所定の手順の違反、その他不平、不正の申立てなどを記録すること。
選挙監視も NP の任務の一つである。

★★★★★★★★★★★★

コロンビア･プロジェクト

Ⅰ．プロジェクト概要（第１次計画）

- 開始時期：2007 年　　資金提供確定次第
- 活動拠点：カリ市、ボゴタ市
- FTM 人数：９名
  （コロンビアでの護衛的同行の経験者）
- ２００７年度予算：52.5 万ドル

Ⅱ．現況

資金調達コンサルタント、ルネ・ペレア女史による資金調達活動が継続されている。８月にはプログラム（実施プロジェクト）担当ジャン･パッションが１週間訪問した。８月時点で EU の人道支援部門とドイツ政府に新たな申請書の提出を用意している。

★★★★★★★★★★★★★

ウガンダ･プロジェクト

Ⅰ．ウガンダの政治、社会情勢

ウガンダはアフリカ大陸中央東よりに位置し、北はスーダン、東はケニア、南はタンザニア、ルワンダ、西はコンゴと国境を接している。

人口約３千万人､面積は日本の本州に相当する大きさで､いくつかの民族からなり､農業中心の最貧国の一つである。１９７１年からの独裁者アミン大統領で知られるが､幾度かのクーデターがあり､それが民族紛争につながってきた｡現在は北部のアチョリ族出身者による「神の抵抗軍」（LRA）と南部に支持基盤のある政府軍との紛争が２０年来続けられてきた。コンゴ、スーダンからの干渉も紛争を複雑化してきた。しかし、２１世紀に入り国連などの介入により和平交渉が進展し住民の平和への期待が大きくなってきている。国内難民の帰還も始まりつつある。

現在、ウガンダ北部に尚 100 万人近くが難民キャンプに残っており､難民キャンプの保護､帰還の安全確保が大きな課題となっている。

Ⅱ．NP の活動状況とプロジェクトの概要

1　2006 年後半から、現地パートナーなどの要請を受けて NP の活動の実現可能調査を開始した。その結果を踏まえ、オルー・オティエノ（前スリランカ FTM）とシャル・シンハ（スリランカのジャフナ FTM の夫）によるプロポーザルがナイロビ総会直前に国際理事会に提出され、現在、電話会議により国際理事会による審議が行われている。一方、アフリカ地域コーデネーターのオムボック・オティエノとデビッド・グラントがナイロビ総会後ウガンダを訪問し資金調達活動の支援に当たった。また、ウガンダでの NP の登録手続きを開始した。理事会でプロポーザルが承認され、資金が確保されればプロジェクトが開始される。

2　プロジェクトの概要

・第１次：3 名の FTM が６ヶ月間で、本格的派遣の具体的立案を行う。カバーする地域は北部ウガンダ

・第１次：12 名の FTM の派遣

＜非暴力平和を語り合う会＞、鹿児島でも

安藤　博

NP ナイロビ総会の報告を兼ねて 10 月半ばから「全国」で行われている＜非暴力平和を語り合う会＞、先週末は山口、鹿児島と二日続きで行われました。総会出席の岡本、阿木、大畑の３理事には文字通り、東奔西走のご苦労をおかけしています。また、各開催地の NPJ 理事、会員が、“興行主”として会場の予約・設営や参加者集めで大汗をかいておられます。大阪では小林、山口では前田恵子、鹿児島では木村朗。そして１２月１日の福島集会に向け駒崎ゆき子さんに、開催案内チラシの作成などからご苦労いただいています。

１８日（日曜日）の鹿児島集会には、間もなくスリランカに赴任される徳留由美さんが、ご郷里の薩摩半島の中央部、加世田の町から母上とともに１時間半ほどの道のりを車まで往復して講師を務めてくれました。この春のミンダナオ活動参加の経験を活かして豊富な写真を使い、またこの地の複雑な歴史的背景などを含めた興味深い講演でした。その内容のうち特に「ミンダナオ」に関することは、目下最終の編集段階に入っている＜NP 国際出版＞、『非暴力で創る平和』の一つの章として記述されています。請う、ご期待。

鹿児島大学で「平和学」などを講義しておられる木村朗・教授のお陰で、５０人利用可能の立派な会場や DVD 映写用機材などを無料で使うことができました。また、地元紙、『南日本新聞』に行き届いた集会案内をしていただいたため、同紙に当日 18 日付け＜きょうの集まり＞を含めて３回の予告記事。そして 19 日（月曜日）朝刊には、大畑、岡本さんも合わせた 3 講師の写真付きで、第２社会面３段の記事が掲載されました（「『非暴力平和隊』活動知って　鹿児島市で講演会」）。

木村さんの関わっておられる平和活動団体のメンバーや鹿児島大学の学生なども参加して、大畑講師の「ガンジー」、そして「軍国少年から転向した平和学徒」岡本講師の、インド独立や冷戦終結など非暴力で達成された大きな実績についての熱弁に熱心に聞き入っていました。ただ、木村教授を除けば NPJ メンバーではないひとたちだけの参加です。参加者は 34 人と、会場の立派さからすれば少しさびしい感じでした。地紙記事の見出しにいみじくも表れているように、NP はとにかく知られていないのです。

平和憲法擁護の活動などに関わっておられるというやや年配の参加者が、「こうした貴重な活動を維持していくには、当然資金をしっかり集めねばならないはずだが、主催者側からカンパなどを求める発言がない。袋でも回したらどうか」と、苦言とも受け取れる発言がありました。この発言を“渡りに船”と、配布してある NPJ リーフレットや赤い線の振込み用紙に記載されている会費規定を読み上げ、「どうもおカネ集めには内気な、“士族の商法”をやっているものですから」と、会員募集にこれつとめました。結果がどうなるか。

カンパ発言の方は、去り際「自分で言い出したのだから」とお金を置いていって下さいました。しかし、その場で NPJ 参加を申し出た方はありません。熱心に質問をされた女性参加者の一人は、「賛助会員でも 5000 円、この場で出すとなるとつらいのよ。毎月 500 円の分割はどうかしら。それでも年 6000 円にはなるんだから」とご提案され、帰っていかれました。

2007年4－9月実績

H19.11.15

非暴力平和隊・日本の2007年4月から9月までの会計報告です。

	項目	2006年度実績	2007年度予算	4-9月実績	達成率(%)
1	参加費	29,100	40,000	131,500	329
2	会費	1,106,000	1,200,000	512,000	43
3	カンパ	654,572	750,000	501,990	67
4	スリランカ･カンパ				
5	賛助会費				
6	雑収入	67,237	72,000	20,901	29
7	収入計	1,856,909	2,062,000	1,166,391	57%
8					
9	商品仕入(書籍等)	50,000	50,000	－	
10	発送配達費	97,960	100,000	32,640	33
11	給料手当	360,000	360,000	180,000	50
12	事務所賃貸料	300,000	300,000	125,000	42
13	振込料	15,530	16,000	7,200	45
14	会場費	12,669	20,000	16,400	82
15	事務費	72,149	80,000	50,730	63
16	旅費交通費	202,160	300,000	83,050	28
17	通信費	54,300	80,000	33,800	42
18	活動支援費	160,000	400,000	10,000	25
19	ナイロビ総会旅費、宿泊費		500,000	420,650	84
20	アジア地域会議				
21	講師費用	142,000	150,000	60,000	40
22	研修参加費	32,760	40,000	－	
23	雑費	50,031	60,000	16,702	28
24	スリランカ･カンパ			－	
25	リーフレット作成費	340,348		－	
26	支出計	1,889,907	2,456,000	1,036,172	42%
27					
28	当期収支過不足(7-26)	−32,998	−394,000	130,219	
29	前期繰越剰余	1,086,605	1,053,607	1,053,607	
30	今期繰越剰余金(28+29)	1,053,607	659,607	1,183,826	
31					
32	特別収入	20,000,000		600,000	注記:1
33	特別支出	−8,000,000	−8,000,000	−4,584,490	注記:2
34	特別収支(32-33)	12,000,000	−8,000,000	−3,984,490	
35	残高合計(前期+28+34)	13,053,607	4,659,607	9,199,336	
36	未払金(負債の部)	113,560		79,687	
37	資産残高(35+36)	13,167,167		9,279,023	

特別収支説明

庭野平和財団助成金	収入	600,000	注記:1
助成金をスリランカ送金	支出	604,000	
NP国際事務局送金	支出	2,301,800	
東アジア日韓会議支出	支出	1,678,690	
	支出計	4,584,490	注記:2

非暴力平和隊・日本　4－9 月会計報告に関するコメントとお願い

2007 年度 4－9 月期の会計報告について若干のご説明をさせていただきます。

皆様のご支援により、経常会計は収入、支出ともにほぼ予算に近い達成率で終えることができました。9 月のナイロビ総会関係費用は夏期のカンパをお願いしましたが、費用を上回るカンパを頂き感謝です。

特別会計では、庭野平和財団よりスリランカの平和委員会支援に対する 60 万円の助成金が交付されましたので、8 月 17 日に NPSL に送金いたしました。また，8 月に NP 本部会計が内規で定められている 2 ヵ月分相当のキャッシュフローを大幅に下回るため緊急援助の要請があり、2 万ドルを送金しました。さらに、8 月 9－11 日、東アジア・日韓会議の費用として 200 万円を予算化しましたが，実績は 160 万円強でした。

私たち事務局は、経常会計の収支を確保することを基本としております。11 月から 12 月にかけて、ナイロビ総会の主要地域での報告会を開催しており、そのための費用に約 50 万円を予定しております。

10－3 月期の経常会計の収支を健全化するためには会費の確保が必要であり、そのための最善の努力をいたす所存でありますので皆様のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

非暴力平和活動と＜9 条世界会議＞

安藤　博

「暴力・軍事力に拠らずに平和を創る」という日本国憲法 9 条の理念を世界に向けて広くアピールすることを目指して、2008 年 5 月 4-6 日、千葉県幕張メッセで、「1 万人」の＜9 条世界会議＞が開催される。わたしたち非暴力平和隊（NP）の活動は、文字通り 9 条の理念を世界の紛争地で活かそうとするものであり、したがって NPJ は、この＜世界会議＞の賛同団体となっている。君島東彦・共同代表は、「呼びかけ人」（資料 I 参照）に加わっている。わたくしは、会議準備・運営のための実行委員会（資料Ⅱ）のメンバーとして、ことし春以降、ほぼ週に 1 度、実行委事務局のある東京・高田馬場に出かけている。わたしの NPJ 理事としての活動は、多くの部分、この実行委メンバーに関わることに当てられている。

と、えらそうに言っても、実際にしているは、貧乏浪人の唐傘貼り内職を思い出すようなことである。ポストカード、缶バッチなどの＜9 条グッズ＞を、各種の市民団体集会などに出かけて売るのに備え、9 枚、9 個の語呂合わせでそろえて袋に入れたりする。こうした作業を、この夏からは毎週木曜日を定例として 5、6 人のメンバーでしている。「あーらアンドウさん、1 枚足りないわ」と、テレビ工場などのアセンブリーラインなら、その末尾のチェック工程にいるような女性が睨む。“不良品”を出すくせに、他のメンバーに比べてカードをそろえたりする作業のスピードがずっと遅いのも悔しいが、「年をとると指先のアブラが少なくなるんだって」

とあっけらかんに言ってくれるのが、さらにこたえる。

「これなら、“多い少ない”の間違いがない」と思った缶バッチ9個を9箇所の、貼り付け場所の決まったボール紙台紙に取り付ける作業をしながらふと出たひとことが、また悪かった。「これ、老人ホームに持っていって、ボケ防止作業にやらせるといいね。誰でもできそうだから」と言うのに、チェック係りがぴしりと決め付ける、「アンドウさんの、ぽろぽろ外れちゃう」。「ああ、なにをやってもだめなんだな」と嘆いて見せれば、ついに止めをさされる、「いいのよ、そうやってがんばってくれてるだけで、みんな元気が出るんだから」。

この雑務はしかし、冗談ではすまない、なかなか深刻なものなのである。

＜世界会議＞開催予算は、以下のようになっている。

- 会場借り上げ料、海外からのゲスト旅費、通訳料など会議費、3400万円。印刷など広報費、1000万円、人件費、交通費など管理費など、1300万円。合わせて5700万円の支出を、
- 賛同金（一口が、団体10000円、個人2000円）、3200万円。グッズ販売、1200万円。入場料（一人1000円）などで、1300万円。これら三種を合わせた収益でまかなう。

アンドウさんは、このうちのグッズ販売（キャンペーン部）に携わっているわけだが、この販売計画を話し合う集まりで、「あーら」アンドウさんの“いじめ”を無邪気にしてくれるようなおねえさんが質問した、「収益と売り上げと、どうちがうのかしら？」と。活動資金のほとんどを原価なしの会費や募金でまかなっている市民活動のメンバーだから、ポストカードでもTシャツでも、グッズがただで出来るわけではなくて、それなりの原価がかかっていることに思い及ばないひともいるわけである。

グッズ収益1200万円と言えば、原価を半分ぐらいで済ますとしても、2000万円余という売り上げが必要になる。「今日は浦和の映画集会で、3万円売ってきました」、「今日は品川で・・・」と、キャンペーン部メンバーの献身的な努力の様子が毎日のメールで報告されている。が、9月20日現在、売り上げ380万円、収益は100万円にとどまっている（この時点では、原価率が7割を超えているが、制作費などをほぼ払いきっているので、以後の売り上げは、大方収益になるという）。

賛同金募金も9月20日時点では、約500万円。これではいけないと、グッズ販売などを2倍にスピードアップすると鞭が入った。現時点では、かなり伸びているだろう。

問題は、幕張メッセの大会場に、1万人を集めるという目標に合わせて人集めができるかどうかである。長渕、桑田のコンサートではない、＜憲法＞だ。旧来の＜護憲派＞の枠を大きく超えて、憲法をひとごとと思いかねない若者なども引きつけられるようにと、３月末に発足した実行委のメンバーは、そのためのイベント企画などに知恵をしぼっている。地雷廃絶キャンペーンのノーベル平和賞受賞者、ジョディ・ウィリアムズさんの招待がダメになったのに代わり、北アイルランドの平和活動家で、やはりノーベル平和賞受賞者のマイレッド・マグワイアさんがその

“目玉”である。NP のナイロビ総会で行なった基調演説のすばらしい迫力を、総会に出席した阿木幸男.・新国際理事は 10 月半ばから全国で行っている＜NP 総会報告会＞で熱を込めて紹介している。が、「すばらしい」は聞いたから言えることである。どうしたら来て聞いてもらえるか。「1 万人集め」の目的は、チケット収入 1000 万円ではない。日ごろ憲法、平和、非暴力など頭にないようなひとびとにも＜9 条＞をアピールすることだが、それにしても、１０００円 x1 万という算術が成り立つかどうかが大いに心配になる。

「2008 年年明け以降、爆発的に＜世界会議＞機運が広がってくる」ことを目指して 10 月 26 日記者会見をした。そのための Fax や電話などにかけた手間と時間は、自分も含めて並々ならぬものだった。記者会見には、かなり多くが集まった。しかし翌日の朝刊を見ると、この国際イベントのニュースを全国版で報じているところはない。かろうじて、たとえば『朝日新聞』が、開催地のある千葉の県版トップになっている。が、東京都心や多摩などの版には載っていない。『しんぶん赤旗』が大きく取り上げたが、これが“9 条無縁”の一般人を一人でも多くという目的からして、プラスかどうか。

実行委に名を連ねる自分には、「財政責任」がある。つまり、グッズ販売などが目論見通りにできず、たとえば 1000 万円の赤字が出れば、それを約 40 人の実行委員で約２５万円ずつ分担して埋める責任がある。「そうなったら、夜逃げするか、わが家人の顔のしわにアイロンをかけコンビニなどで働かせなければなりません」と、平和活動団体などでちょっとした講演をするような機会があると、その終わりにこうした“泣き”を入れて賛同金集めを試みている。

繰言を言っていても仕方がない。NPJ にとっとも、是非成功させねばならない集まりである。

マグワイアさんの講演などがある初日 5 月 4 日のあと、5、6 日は同じ幕張の会場で各種の分科会（外国人ゲスト中心）や自主企画イベントが予定されている。このため、君島、大畑両代表と阿木国際理事とが協議してまとめた自主企画開催案を 11 月 14 日の実行委会議で以下のように提案した。

＜非暴力平和（NP）＞の理論と実践活動の専門家による報告、並びに会場の参加者との討論を行う。3 人のパネラーが、

① 世界の紛争地における NP による平和的解決の試み

② 平和創造における＜非暴力平和＞の理論的背景・意義

③ 日本における非暴力平和活動と日本国憲法がおかれている現実との相克

についてそれぞれ 20 分程度ずつ報告。次いで会場の参加者との討論を行う、

といった構成である。

あと約一ヶ月、12 月半ばまでにこうした本会議、自主企画イベントや、「I 万人」の成否を決める人気ミュージシャンなどの出演可否などを含めた全体プログラムを確定する。2 月末にはいよいよチケット販売による本格的な開催準備に入る―これが、11 月 14 日の実行委プログラム委員会で決めた＜9 条世界会議＞までのスケジュールである。

９条世界会議呼びかけ人

（２００７年１１月９日現在）

青木敬介　（全国自然保護連合代表)
浅井基文　（広島平和研究所所長）
雨宮処凛　（作家）
新井淳一　（テキスタイル作家）
有馬頼底　（臨済宗相国寺派管長、金閣寺・銀閣寺住職）
ロニー・アレキサンダー（神戸大学大学院教授）
市川森一　（脚本家）
池田香代子　（翻訳家）
池辺晋一郎　（作曲家）
伊勢崎賢治　（東京外国語大学教授、元国連シエラレオネ派遣団武装解除担当部長）
伊藤真　（伊藤塾塾長）
井上ひさし（作家・劇作家、日本ペンクラブ会長）
内海愛子　（日本平和学会会長）
小熊英二（慶應義塾大学総合政策学部教員）
落合恵子（作家・子どもの本の専門店　クレヨンハウス主宰）
勝俣誠　（明治学院大学国際平和研究所所長）
加藤登紀子　（歌手）
鎌田慧　（ルポライター）
鎌田實　(医師)
香山リカ　（精神科医）
君島東彦　（非暴力平和隊国際理事）
古今亭菊千代　（落語家）
児玉克哉（国際平和研究学会元事務局長）
後藤祥子　（日本女子大学学長)
小沼通二　（物理学者、元パグウォッシュ会議評議員）
小堀樹（元日本弁護士連合会会長）
小森陽一　（東京大学教授）
斎藤貴男　（ジャーナリスト）
佐高信　（経済評論家）
マイケル・シーゲル（南山大学社会倫理研究所員）
シキタ純（NPO法人ビーグッドカフェ代表理事）
品川正治　（国際開発センター会長、経済同友会終身幹事）
ジェームス三木　（脚本家）
辛淑玉　（人材育成コンサルタント）
高遠菜穂子　（イラク支援ボランティア）
龍村仁　（映画監督）
田中優子　（江戸文化研究家）
谷山博史　（日本国際ボランティアセンター（JVC）代表理事）
辻信一　（NGO「ナマケモノ倶楽部」世話人）
辻井喬　（詩人、作家）
堤未果　（ジャーナリスト）
中川敬　（ソウル・フラワー・ユニオン）
中澤正夫（医師）
仲田普　（弁護士）
中野麻美（弁護士）
成瀬政博（画家）
新倉修　（日本国際法律家協会会長）
西野瑠美子（VAWW-NET JAPAN共同代表）
朴慶南（パク・キョンナム）（エッセイスト）
肥田舜太郎（被爆医師)
日野原重明（聖路加国際病院理事長）
平岡敬　（前広島市長）
ピーコ　（服飾評論家・シャンソン歌手）
アーサー・ビナード（詩人）
藤原真由美　（弁護士）
星川淳　（グリーンピース・ジャパン事務局長）
本多立太郎　（戦争体験語り人）
松井ケティ（ハーグ平和アピール平和教育地球キャンペーン国際諮問委員）
松浦悟郎（日本カトリック正義と平和協議会会長）
丸本百合子　（医師）
三浦光世　（三浦綾子記念文学館館長）
水島朝穂　（早稲田大学教授）
ゴードン・サイラス・ムアンギ（四国学院大学）
武者小路公秀（元国連大学副学長）
武藤徹（数学者）
本林徹（日本弁護士連合会元会長）
森永卓郎（経済アナリスト）
森村誠一　（作家）
山内敏弘　（憲法学者）
山田真（小児科医）
湯川れい子　（作詞家・音楽評論家）
ジャン・ユンカーマン　（映画監督）
吉岡達也　（ピースボート共同代表）
吉武輝子　（作家）
渡辺えり子　（劇作家・演出家・女優）

以上、計７4名

・・・・・・・・・・・・・・・・・

＜９条世界会議＞
日本実行委員会の構成

（川崎哲事務局長の説明メモを、安藤が一部補足修正）

■■会議プログラム委員会　（新倉修委員長）
会議プログラム全体の調整と決定。
☆独自MLあり。
A9_Program@googlegroups.com
会議プログラム委員会の傘下にある小委員会、グループは、以下の通り。
○全体会：　筑紫さん（憲法を生かす会）を中心に独自会議をもち、進行中。
○パフォーマンス：　石塚さん（音楽9条の会）を中心に独自会議をもち、進行中。
○選考調整小委員会　（新倉修小委員長）：
分科会および自主企画の調整
国際NGO関係者、呼びかけ人らを中心に独自会議をもち、進行中。
　☆独自ML設置中。
○その他、「ピースウォーク」や「第九」について、それぞれ実行グループが独自に作業中。（「ピースウォーク」は、日本山妙法寺の米国東海岸拠点にいる佐藤上人が発案。浅見靖仁・NPJ 理事が、そのための実行委員会リーダーとして奮闘中。2008/2/24 広島を出発。）
○今後、分科会や自主企画、また、全体会の個別の演目ごとに、小委員会や実行グループが立ち上がって活動を始める必要がある。
■■キャンペーン部　（松村真澄部長）
9条世界会議について、より多くの人々に知らせていく役割。そのための広報戦略、広報グッズ制作、グッズ頒布、出張講座などを行う。
☆独自MLあり。gohan0406@yahoogroups.jp
キャンペーン部の傘下にあるチームは、以下の通り。（安藤はここに属しているが、下記のように小分けされると、そのどこにいるのかわからなくなる）
○クリエイティブ・チーム：　広報戦略の提案と、それに沿った広報グッズ・ツール（ウェブサイト、メルマガ、リーフ、チラシ、各種グッズ）の制作。Cazman（ウェブ）、成瀬慧（リーフ、チラシ、各種グッズ）、おおくに（メルマガ）が中心に作業している。　週に1回くらいのペースで、会議をもっている。
○グッズ頒布：　グッズ頒布の作業および、頒布計画や実績評価など。
○アウトリーチ（新規潜在層開拓）、出張講座などについて情報集約担当者を置き、キャンペーン部として意見を出し合いまた分担しながら進めている。
○そのほか、学生ボランティアによるビデオやフリーペーパーづくりなどの計画も進んでいる。
■■組織委員会　（高田健委員長）
実行委員会参加団体のなかで、主に全国組織をもつ団体が集まり、会議成功に向けた運動の拡大について話し合う。すでに第1回目を終え、当面は、月に1回ペースで進める。
■■財政委員会　（笹本潤委員長）
財政の現状分析、対策について話し合い、実行する。現在、月に1～2回のペースで進めている。
■■調整会議
上記各委員会の長および中心メンバーが情報共有とさまざまな調整を行うための会議を、11月上旬から、2週間に1回のペースで開催する。
■■事務局
事務局会議は、2週間に1回のペースで実施している。独自MLをもっている。

会 員 募 集

■非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援してくださる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申し込みは、**郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊･日本ウェブサイトの「入会申し込みフォーム」**をご利用下さいますようお願いいたします。

正会員（議決権あり）
- 一般個人：１万円
- 学生個人：３千円
- ＊ 団体は正会員にはなれません。

賛助会員（議決権なし）
- 一般個人：５千円（１口）
- 学生個人：２千円（１口）
- 団体　：１万円（１口）

■ **郵便振替：00110 - 0 - 462182　加入者名：NPJ**
＊通信欄に会員の種類を(賛助会員の場合は口数も)ご明記ください。 例：賛助個人１口

■ **銀行振込：三井住友銀行 白山支店　普通 6622651　口座名義：NPJ 代表 大畑豊**
＊銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話･ファックス･メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ 事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

■ **ウェブサイトからのお申し込み：http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/nyukai.html**

案 内:

『平和･人権･ＮＧＯ すべての人が安心して生きるために』（新評論、2004 年）

君島共同代表が「平和をつくる主体としてのＮＧＯ」という章で、ＮＰのことを詳しく紹介しています。この章の抜き刷りを販売しております。ぜひＮＰの紹介にご活用ください。Ａ５版・表紙カラー・一部３００円（送料別）、ご注文は事務局まで。

「ふくしま非暴力平和隊ネット」で試作した缶バッジ

非暴力平和隊を宣伝し、資金を集めるために、ＮＰＪ福島在住メンバーで作った缶バッジの普及にご協力ください。ＮＰの鳩のデザインをあしらった、かわいく、洒落たバッジです。価格は１個２００円で、１０個以上のご購入の場合は１個１００円です。
【９０円切手を貼った返信用封筒】と【代金の小為替】を同封して次までお送りください。〒９７１－８１７１　いわき市泉が丘２－３－４　鞍田　東

▲◈◉◍◯▣目　事 務 局 便 り　目▣◯◍◉◈▲

今回は NP の実質的な最初の総会ともいうべきナイロビ総会を中心に編集しました。NP の実態、どんな人たちの集まりであるかを少しでも理解していただくために、大畑共同代表、阿木国際理事が撮影したナイロビ総会の写真を思い切ってカラーコピーにしました。NP の活動の一端をより身近に感じていただければ幸いです。（大橋　祐治）

非暴力平和隊(NP,Nonviolent Peaceforce)とは……

地域紛争の非暴力的解決を実践するために活動している国際 NGO で、非暴力平和隊･日本(NPJ)はその日本グループです。

これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、功を収めて来ました。NPはこれを大規模に発展させるために 2002 年に創設されました。非暴力･非武装による紛争解決が「夢想主義」でも「理想主義」でもなく、いちばん「現実的」であることを実践で示していきます。

NPは、地元の非暴力運動体･平和組織と協力し、紛争地に国際的なチームを派遣、護衛的同行や国際的プレゼンス等によって、地元活動家等に対する脅迫、妨害等を軽減させ、地域紛争が非暴力的に地元の人によって解決できるよう、環境づくりをすることを目的としています。

NPは 2003 年9月からスリランカでの活動を開始し、現在20カ国から25人のメンバーを派遣しています。